

「キリストの名によって」

使徒言行録 3:1-10

ペンテコステの日に、弟子たち聖霊がくだって、最初に起こった出来事は、「言葉の奇跡」とでも言うべき出来事でした。人前で語ることも出来ず、隠れ家に閉じ籠っていたような弟子たちが、大勢の人々の前で、大胆に力強く神の言葉を語るようになったのです。そしてその彼らの語った言葉が、諸外国から集まっていたすべての人々に、それぞれの生まれ故郷の言葉で聞かれ、神の御業に心を打たれて、3千人もの人々が、悔い改めて洗礼を受け、仲間に加わったのです。

この聖霊の降臨によって起こった第二の出来事は、「交わりの奇跡」ともいうべきことでした。3千人にも膨れ上がったキリストを信じる者たちの群れは、一つ心になって共に礼拝を捧げ、祈りを合わせ、みんなが喜んで持ち物を持ち寄って、それを共に分け合うという、主にある美しい交わりを形づくったのです。その交わりは、「民衆全体から好意を寄せられ」、日々、新たな仲間が加えられたのです。このようにして、最初の「教会」が誕生したのです。聖霊によって誕生したこの最初の教会の姿は、後々の教会のあるべき姿として、「初代の教会に帰れ」と言われるようになったのです。

このような、聖霊の働きによって起こった「言葉の奇跡」と「交わりの奇跡」に引き続いて、弟子たちの間で起こった第三の奇跡は、「業(わざ)の奇跡」ともいうべきことでした。使徒言行録2章43節に、「すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていた」と記されていますが、その「不思議な業」の一つ、最初の「しるし」が今日の3章に記されているペトロによる癒しの記事です。

これは、エルサレムの「美しい門」と呼ばれる門の前で起こった出来事です。ペトロとヨハネが午後3時の祈りために神殿の上って行ったときのことです。その門の前に、「生まれながら足の不自由な男」が運ばれてきて、そこに置かれたというのです。この門の前で施しを乞うためです。

最近、ほとんど街で物乞いをする「乞食」を見かけませんが、私の子供のころは、街角でよく見かけたものです。ことにお祭りなどがあると、神社などの参道に数人の「乞食」がむしろに座って、空き缶などを前において物乞いしている姿を見たものです。今考えると、申し訳ないことをしたと思うのですが、ぼろをまとい真っ黒に汚れたその人たちの姿に近づくことが怖くて、鼻をつまんでそこを避けて通ったものです。

きらびやかな「美しの門」と、その前に置かれた物乞いの姿は、実に対照的で、矛盾したこの世の現実を象徴しているように見えます。今でも、上野公園などに行きますと、ホームレスの人たちの青いビニールシートや段ボールで造られたテント村がありますが、高層ビルに囲まれた芸術の森の中に、今なおそのような生活を強いられている人々がいることに、心が痛みます。世の中は決して平等ではありません。ことにこの格差社会において、さまざまなハンディを負った人々にとっては、どんなに生きにくい社会であろうか、と思います。

この「美しの門」の前に置かれた「生まれた時から足が不自由な男」にとっても、自活して生きて行くということは、実に厳しいことであつたにちがひありません。この

後の箇所には、「彼は40歳を過ぎていた」(4:22)とあります。これまでの40数年の人生、彼は一度も自分の足で立つことも歩くことも出来なかったのです。彼はどれほど自分の人生を呪ったか分かりません。若い時には、それでも、何度も何度も立って歩いてみようと思ったことでしょう。しかし、その度に、彼は倒れて転がり、擦りむいたり痛い目にあったりしたことでしょう。彼は、ついに自分の足で立って、自分の人生を切り開いていくことをあきらめ、「物乞い(乞食)」になって、人の好意に甘えて生きて行くことになったのです。誰にだってプライドがありますから、好き好んで「乞食」になったわけではありません。しかし、一度物乞いをやってみると、これほど楽に、お金を儲ける道はないことに気づき、この安易な生き方から抜け出せなくなったのかもしれない。幸い、彼に同情して手を貸してくれる親切な人たちがいて、彼をこの「美しの門」まで毎日、連れて来て、そこに座らせてくれるようになったのです。彼はその好意に甘えて、来る日も来る日も、そこで物乞いをするようになったのです。

当時のユダヤの社会には、まだ社会保障の制度はありませんでしたが、このような助け合いによる、互助の精神が生きていたのです。いつの時代、どんなに社会福祉や保証制度が充実しても、お互い同士がこのように助け合い、支え合って共に生きるという、この精神は、大切なことだとおもいます。

しかし、私はこの箇所を読むたびにいつも心に引っかかるのは、この2節で使われている「運ばれて来た」とか「置いてもらっていた」という表現です。「運ぶ」という言葉は、ふつう荷物など「物」を運搬するときに使う言葉です。「置く」という言葉も、置物などの「品物」を置く時に使う言葉です。人に対しては、ふつう「運ぶ」ではなく、「連れてくる」とか「背負ってくる」と言いませんか。また人を「置く」とは言わず、「座らせる」とか「横たえる」というような言い方をするように思います。この「運ばれてきた」「置いてもらった」という表現の中に、この生まれながら足の利かない人が、「物」のように「荷物」のように見なされているような気がしてならないのです。

それは、ここに連れてきてくれた人たちの、この足の利かない人に対する扱い方の問題というよりも、この足の不自由な男自身の生き方に対する、この著者の見方が反映しているように、私は思うのです。この「使徒言行録」を書いたのは、「ルカによる福音書」を書いたのと同じルカの筆によるものです。このルカは、パウロの伝道旅行に同行したことのある使徒でもあり、医者でもありました(コロサイ 4:14)。彼は医者立場から、この生まれながら足の利かない男の不自由さに同情しながらも、毎日毎日、親切な人たちの行為に甘えて、惰性的に、物乞いをして生きている彼の生き方に、それでよいのか、という疑問を感じたのではないかと、思われます。

人間は、みな何らかの病や障害、欠けを担っているわけですが、みなそれぞれの重荷を負いながら、何とか自分の足で立って、自分の人生を切り開いて生きて行こうとしているわけです。ところが彼の場合、動かない足だけを見つめて、もう自分はダメだと人生をあきらめて、ただ人の行為に甘えて、惰性的に毎日毎日、荷物のように、運ばれてきては置かれ、運ばれてきては置かれるという生活を繰り返し、物乞いをして生きている。それで、ほんとうに自分の人生を「生きている」と言えるのだろうか？ 人間は「荷物」や「品物」のように存在していればよいというわけではなく、生きることに

喜びと意味を見出し、悔いのない生き方をしなければならない…。なにかそのような批判的な見方が、この「運ばれて来て」「置いてもらっていた」という表現の中に反映しているような気がします。

さて、そのようにして美しの門の前に運ばれて来て、置かれていたこの男は、ペトロとヨハネが通りかかるのを見ると、さっそく施しを乞うたのです。「あわれな乞食ですどうぞ何か恵んでください」と言ったかもしれません。ペトロとヨハネは、彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』と言ったのです。すると彼はてっきり、「何かもらえる」と期待して二人を見つめたのです。するとペトロはこう言ったのです。「わたしには、金や銀はない」と。この言葉にこの男は、どんなにがっかりしたことでしょう。「わたしたちを見なさい」というものだから、てっきり何かもらえると期待して見つめていたのに、「金銀がない」とは何事だ。からかうのもいい加減にしろ! と心の中で思ったに違いありません。

弟子たちは、持ち物を共有にしていたから、確かに金や銀は持ち歩いてはいなかったと思います。それなのに、なぜ、ペトロたちはこの物乞いをじっと見て、「わたしたちを見なさい」などと言ったのでしょうか。私たちは、ふつう、相手の期待や要望に応えられないような時、申し訳ないという思いで、相手の目をじっと見ることさえ出来ずに、相手の期待に満ちた目から、目を反らそうとするのではないのでしょうか。

昨年3月まで、私は所沢の教会の中に住んでいました。教会にはよくホームレスの方などが、訪ねて来られます。何か食べ物がある時には、食べ物と、わずかばかりの電車賃などをポケットマネーから差し上げていましたが、月末などで、財布が空っぽの時は、小心な私は、相手の期待に満ちた視線に耐えることの辛さを感じます。

しかし、この時のペトロたちはちがいました。金銀はないのに、じっと相手を見て、「わたしたちを見なさい」と語ったのです。そして相手がますます期待して、注目しているその目を見つめながら語ったのです。「わたしには金銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。こう言って相手の右手をとって、立ちあがらせると、たちまちその男の萎えた足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出したというのです。生まれながら足が不自由で、立つことさえ出来ないと思っていたこの男が、自分の足で立って歩き出したというのです。

これは、「奇跡」としか言いようのない出来事です。「イエス・キリストの名」という、名前そのものに不思議な力があるわけではありません。「名は体を表す」と言うように、イエス・キリストご自身の力が、聖霊によって弟子たちに宿り、弟子たちを通して、主ご自身が、この足萎えに、立ち上がる力を与え、歩き出す勇気を与えたのです。

それにしても、「わたしたちを見なさい」というペトロの言葉は、一体何を意味しているのでしょうか？ ペテロたちのどこに、見るべき価値があるのでしょうか。この言葉は、この足の不自由な男に、このように語りかけた言葉ではなかったのでしょうか。

「わたしたちを見なさい。わたしたちもあなたと同じように、弱さや破れのある人間だ。一時はイエスを裏切り見捨てたようなダメな人間だ。弟子としても、人間としても自分たちは失格だ。しかし、私たちはお前さんのように、人生をあきらめて座り込んではいない。イエス・キリストの赦しと愛によって、こうしてイエス・キリスト共に歩ん

でいる。あなたの期待する金銀はわたしたちにはないけれども、私たちはそれ以上にはるかに高価な恵みによって、こうして新しい命を与えられて生かされている。主イエス・キリストが、私の弱さや過ちを担って、共に歩んでくださっておられるのだ。あなたも、自分の萎えた足だけを見つめて、人に甘えて安易な惰性的な生き方をするのではなく、キリストの愛と恵みに信頼して、すべてを主にゆだね、自分の足で立って、前に向かって一歩踏み出してごらん」。こういう意味が込められているように思います。

自分の欠けや短所、過去の過ちだけを見つめてダメだダメだと思っている限り、私たちは立ち上がれないのです。イエス・キリストが、私たちと共にいてくださり、私たちの弱さや病いや罪などすべての重荷を共に担ってくださる。そのことを信じて、すべてを主にゆだね、キリストと共に歩み出す時、わたしたちもまた、自分の足で立って新たな歩みを始めることが出来るのです。

「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。私たちも聖霊の助けを頂いて、立ち上がり、主イエスと共に歩み続けたいものです。そして、金銀はなくても、助けを必要としている隣人の手を取って、「主イエス名によって一緒に歩きましょう」と、助けてあげられるような、そのような生き方をしたい、と願います。 アーメン